

滋賀県における行事食の認知・経験の世代間比較

栗本 麻衣子, 高橋 ひとみ, 中平 真由巳

石井 裕子, 小西 春江

Study on the Intergenerational Difference of Cognition and Experience to the Traditional Event Foods in Shiga

Maiko Kurimoto, Hitomi Takahashi, Mayumi Nakahira,
Yuuko Ishii and Harue Konishi

緒 言

食べ物には健康を維持する働きのほかに、人間関係を和やかにして生活に喜びを与える効果もある。古くから日本人の生活の中で伝えられてきた伝統的な祝いや祭りなどの行事は日常生活の節目となり、行事に伴う食べ物には風土に根ざした先人の知恵や喜びが込められている¹⁾。行事が結ぶ食の歴史や文化は日本の食文化を語るうえで大切であり、自分たちの文化を継承していくことが未来の豊かな食生活を培っていく力となる。

しかし、我が国の食生活は近年の生活様式の多様化や核家族化などの浸透により、日本古来より引き継いできた伝統的な年中行事が急速に失われる傾向がみられる²⁾。

そこで、行事食の現状を明らかにするために平成21、22年度の日本調理科学会特別研究として、近畿2府4県において行事の認知状況や行事食の摂取状況等の調査を行った。本報では、実施した行事食調査から滋賀県の現状を把握し、行事と行事食の認知状況や世代間による違いについて検討を行ったので報告する。

方 法

- 1) 調査時期：2009年12月～2010年3月
- 2) 調査対象：近畿の大学・短期大学に在籍する学生およびその親、その他近畿在住者
- 3) 調査内容：年中行事の認知度及び経験値、行事食の喫食経験について調査を行った。年中行事は、「正月」「人日」「節分」「上巳」「彼岸の中日(春)」「端午」「盂蘭盆」「七夕」「土用の丑」「重陽」「お月見」「彼岸の中日(秋)」「冬至」「クリスマス」「大みそか」「春祭り」「秋祭り」の17項目とした。

これらの行事で食べられる行事食は、正月3種類、おせち料理11種類、人日1種類、節分3種

滋賀県における行事食の認知・経験の世代間比較

類，上巳4種類，彼岸の中日（春）2種類，端午5種類，盂蘭盆4種類，七夕5種類，土用の丑1種類，重陽2種類，お月見2種類，彼岸の中日（秋）2種類，冬至1種類，クリスマス2種

表1. 調査対象者の属性

		子世代		親世代		高齢世代	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
性別	男性	6	4.3	22	16.8	6	17.1
	女性	133	95.7	109	83.2	29	82.9
年齢	20歳未満	113	81.3	0	0	0	0
	20歳代	26	18.7	0	0	0	0
	40歳代	0	0	78	59.5	0	0
	50歳代	0	0	53	40.5	0	0
	60歳代	0	0	0	0	30	85.7
	70歳代	0	0	0	0	5	14.3
家族構成	同世代	21	15.2	36	27.7	14	40
	二世代	59	42.8	55	42.3	12	34.3
	三世代	50	36.2	30	23.1	7	20
	四世代	0	0	2	1.5	0	0
	本人一人	7	5.1	7	5.4	2	5.7
	その他	1	0.7	0	0	0	0
職業	会社員	0	0	33	25.2	5	14.3
	自営業	0	0	10	7.6	5	14.3
	専業主婦	0	0	26	19.8	10	28.6
	学生	136	98.6	0	0	0	0
	アルバイト・パート	2	1.4	52	39.7	9	25.7
	その他	0	0	10	7.6	6	17.1
調理担当	はい	11	8.1	102	78.5	26	74.3
	いいえ	124	91.9	28	21.5	9	25.7
行事食の影響	父方	30	22.7	18	14.9	4	12.5
	母方	53	40.2	64	52.9	18	56.3
	配偶者	0	0	20	16.5	6	18.8
	その他	4	3	9	7.4	3	9.4
	わからない	45	34.1	10	8.3	1	3.1

類, 大みそか 3 種類, 春祭り 2 種類, 秋祭り 2 種類の合計55種類とした。

4) 調査方法: 全国統一調査用紙を用い, 自己記入式留め置き法によるアンケート調査を行った。

5) 解析対象: 滋賀県出身の子世代 (10~20歳代), 親世代 (40~50歳代), 高齢世代 (60歳以上) とし, 子世代と親世代の比較, 親世代と高齢世代の比較を行った。対象者の属性は, 表 1 の通りである。

6) 有効回答数: 324部 (子世代139部, 親世代131部, 高齢世代35部)

7) 解析方法: SPSS による単純集計, クロス集計, 有意差検定は χ^2 検定により行った。

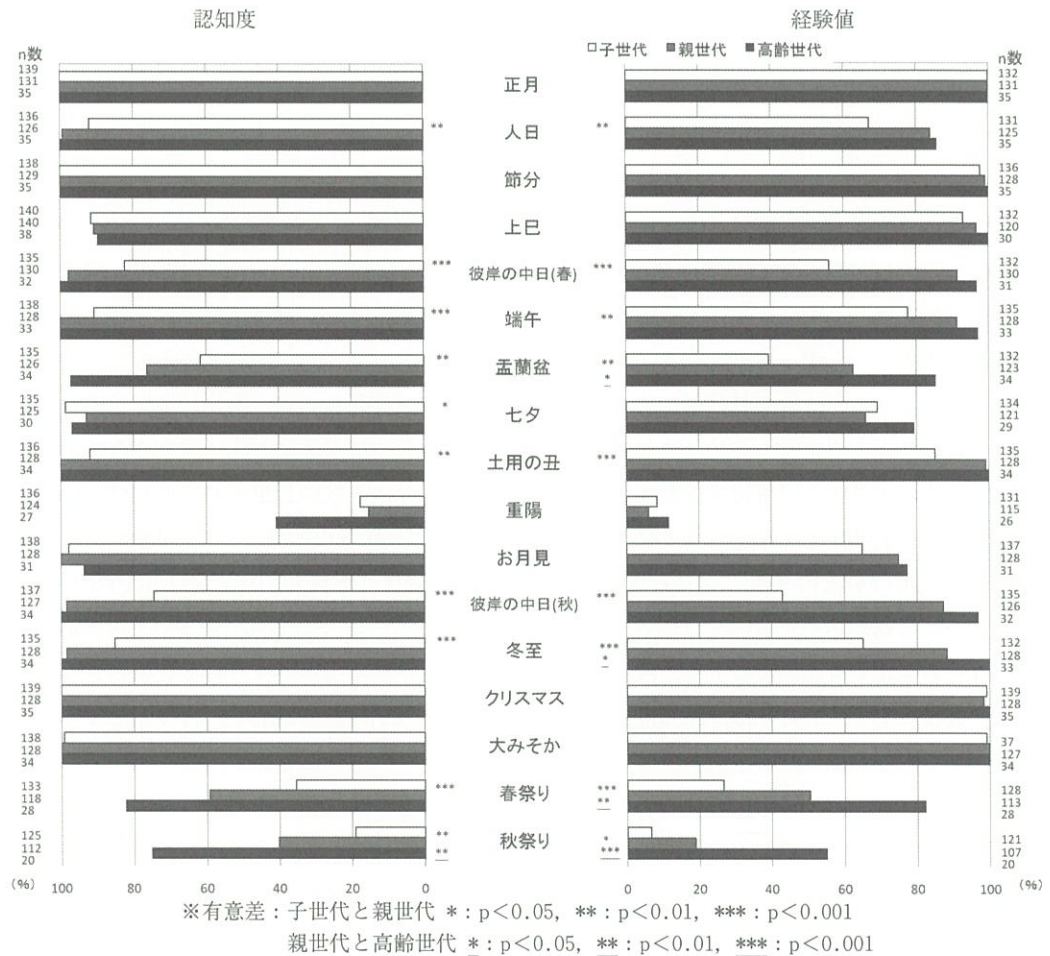


図 1. 年中行事の認知度および経験値

結果および考察

1. 年中行事の認知度

各世代の年中行事の認知度を図1に示した。子世代は正月・節分・クリスマスが100%、七夕・大みそか99%、お月見98%、人日・土用の丑92%、上巳・端午91%の順で多数の者がこれらの行事を認知しており、親世代は正月・節分・端午・土用の丑・お月見・クリスマス・大みそか100%、人日99%、彼岸の中日(春・秋)・冬至98%、七夕93%、上巳91%の順で高かった。高齢世代では正月・人日・彼岸の中日(春・秋)・端午・土用の丑・冬至・クリスマス・大みそか100%、盂蘭盆・七夕97%、お月見94%の順で高かった。日本の伝統行事である五節句(人日、上巳、端午、七夕、重陽)の認知度よりも、正月、節分、クリスマス、大みそかなどでの認知度が高い傾向がみられた。また、先祖に対する儀礼に関連する彼岸の中日(春・秋)や盂蘭盆は、高齢世代での認知は非常に高かったが、それに比べ親世代ではやや低くなり、子世代ではさらに低くなる傾向がみられた。地域における行事である春祭り・秋祭りでも同様の結果が得られ、古来より引き継いできた伝統的な年中行事が急速に失われている傾向がみられた。

2. 年中行事の経験値

各世代の年中行事の経験値を図1に示した。子世代は正月100%、大みそか・クリスマス99%、節分98%、上巳93%の順で多数の者が経験しており、親世代は正月・大みそか100%、節分・土用の丑99%、クリスマス98%、上巳97%、端午91%の順で高かった。高齢世代では正月・節分・上巳・土用の丑・冬至・クリスマス・大みそか100%、彼岸の中日(春・秋)・端午97%、お月見94%の順で高かった。経験値においても認知度と同様に、五節句(人日、上巳、端午、七夕、重陽)の経験値よりも正月、節分、クリスマス、大みそかなどでの経験値が高い傾向がみられた。クリスマスはキリストの降誕を記念する祝祭であるが、キリスト教の行事としての意味合いから離れて日本の行事として定着していることがわかり、松本や加藤らの報告^{3,4)}と同様の結果が得られた。重陽は中国の故事にならったものとされ、江戸時代に五節句の中で最も公的な行事であったのにも関わらず、現在ではほとんど見かけなくなっているといわれている。²⁾滋賀県においてもどの世代でも経験値が低く、伝統行事としての習慣が無くなってきていると推察される。また、人日、七夕、お月見は、認知度は高かったのに関わらず経験値は低く、行事としての意識が低下していると思われる。

彼岸の中日(春・秋)や盂蘭盆の子世代の経験値が認知度比べて非常に低い理由として、親世代の経験値が低いために子世代の行事への参加も低下しているためだと考えられる。

春祭り・秋祭りは、どちらも世代が若くなるにつれて認知度・経験値が急速に低下し、受け継がれなくなっている傾向にあった。これまで行事が繋いできた親戚や近隣に住む人々との結びつきやその土地の文化も同時に失われる傾向にあると考えられる。

3. 行事食の喫食経験

各行事を経験したことがあると答えた者における, 行事食の喫食経験を以下に示した。

1) 正月

正月における行事食の喫食経験を図2に示した。正月の三が日を雑煮で祝うということは全国的にみられる習慣であるが⁵⁾, 滋賀県においても雑煮の喫食経験は全世代で100%であり, 世代を越えて受け継がれていた。一方, 病を防ぐ薬酒として用いられてきた屠蘇²⁾は, 世代が若いほ

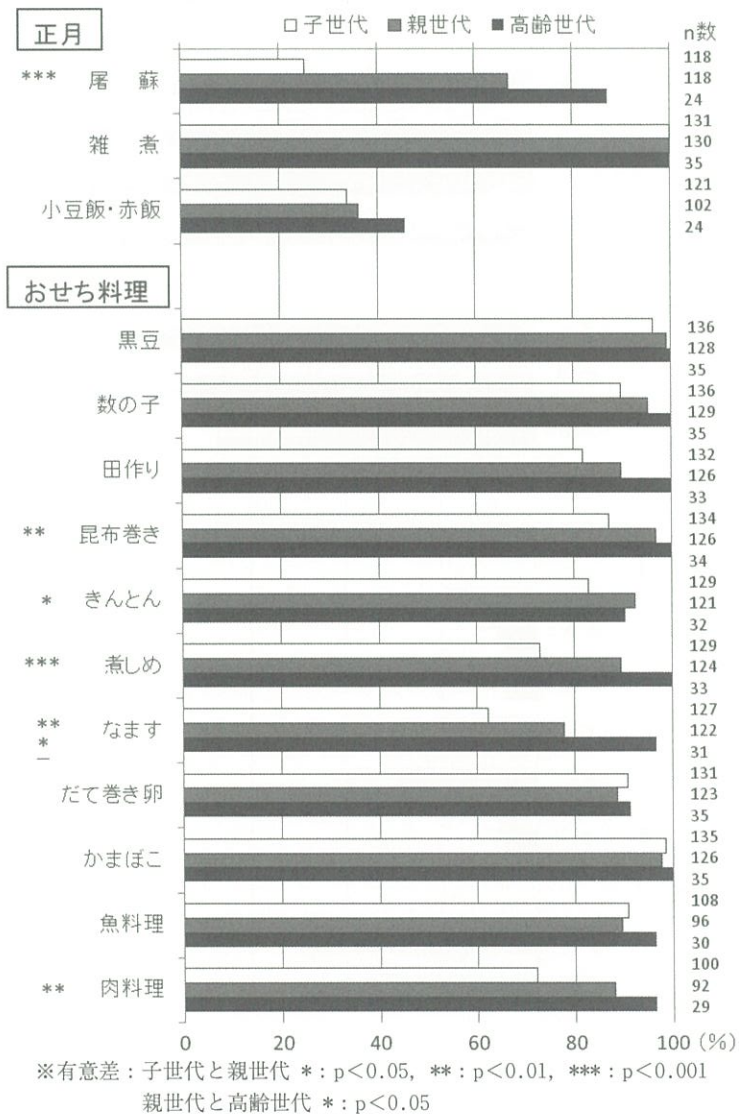


図2. 正月における行事食の喫食経験

滋賀県における行事食の認知・経験の世代間比較

ど低く、子世代25%と親世代67%に1%の有意差が認められ、屠蘇は現代に受け継がれなくなっている傾向にあるといえる。

おせち料理は他の行事食に比べ全体的に喫食経験が高い傾向にあったが、世代が若くなるにしたがって少しずつ低くなる傾向がみられた。全世代で90%以上である得に喫食経験の高い料理

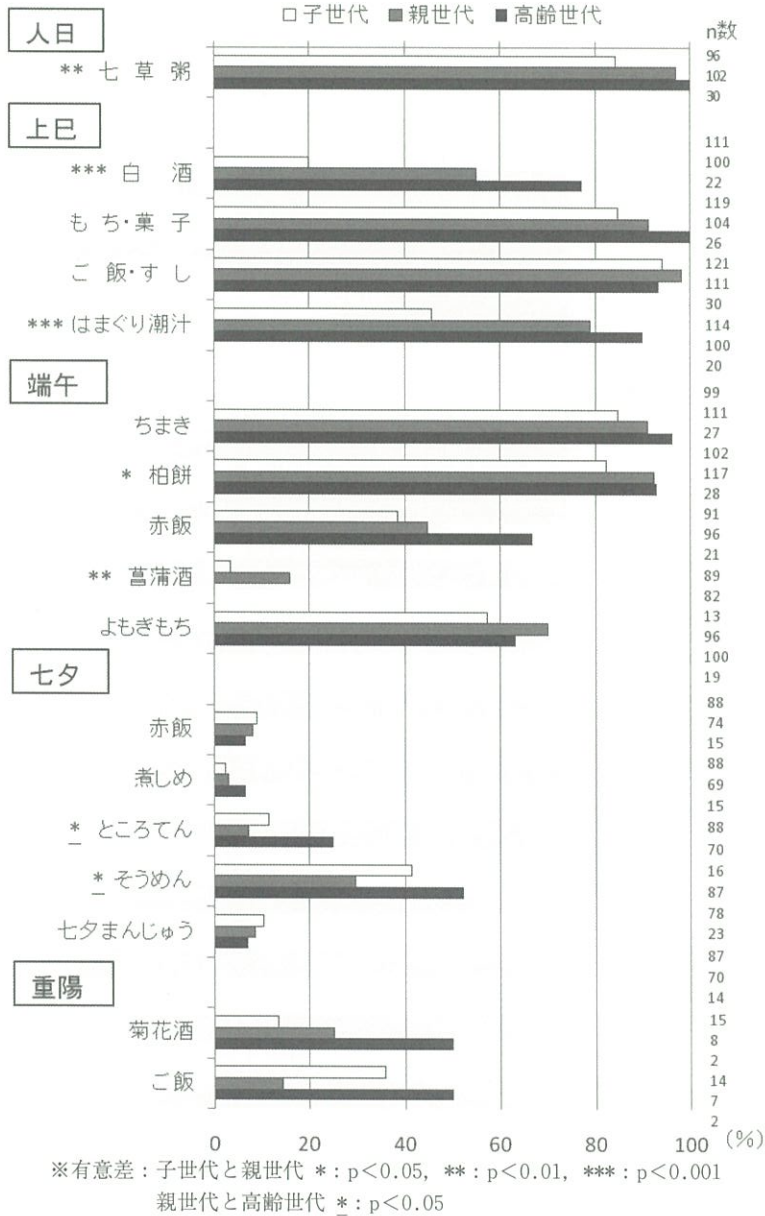


図3. 五節句における行事食の喫食経験

は、黒豆、数の子、かまぼこ、魚料理であり、年齢に関係なく多くの者が喫食していた。昆布巻き（子世代87%、親世代97%、高齢世代100%）、きんとん（子世代83%、親世代93%、高齢世代91%）、煮しめ（子世代73%、親世代90%、高齢世代100%）、肉料理（子世代72%、親世代88%、高齢世代97%）は、子世代と親世代で有意差が認められ、現代では少しずつ受け継がれにくくなっていると思われる。なますは子世代62%、親世代78%、高齢世代97%であり、子世代と親世代間、親世代と高齢世代間の両方に有意差が認められ、世代が若くなるにつれて急速に伝承されなくなっていると思われる。

2) 五節句（人日・上巳・端午・七夕・重陽）

古来伝承され続けてきた行事である五節句の各々における行事食の喫食経験を図3に示した。一年中の無病を祈る人日の七草粥（子世代84%、親世代97%、高齢世代100%）は、全世代で比較的高い傾向にあったが、子世代と親世代に有意差がみられた。

上巳では、餅・菓子（子世代85%、親世代91%、高齢世代100%）、ご飯・すし（子世代94%、親世代98%、高齢世代93%）は全世代で高い傾向にあった。白酒（子世代20%、親世代55%、高齢世代77%）とはまぐり潮汁（子世代46%、親世代79%、高齢世代90%）は子世代と親世代で1%の有意差が認められ、この行事食が近年になって食べられなくなっている様子がうかがえる。

端午は、子世代と親世代において柏餅（子世代82%、親世代92%、高齢世代93%）に5%の有意差が認められたものの、柏餅とちまき（子世代85%、親世代91%、高齢世代96%）の喫食経験は高い傾向にあった。関西地方では中国の故事によりちまきを食し、関東地方では端午の節供のものとして柏餅を食す傾向があるとされているが¹⁾、本調査において滋賀県ではどちらも多くの者が食していることが明らかとなった。菖蒲酒（子世代3%、親世代16%、高齢世代0%）はどの世代でも喫食している者は限られていた。

七夕の行事食は瓜や果物、そうめんなどがあるが¹⁾、滋賀県では七夕独自の伝統食が浸透されておらず、どの世代においてもほとんどの行事食が食べられていなかった。そうめん（子世代41%、親世代29%、高齢世代54%）だけが他の行事食に比べて喫食経験が高い傾向にあった。そうめんが親世代よりも子世代で喫食率が高いのは、幼稚園や小学校の給食に行事食を取り入れている影響だと思われる。

重陽では菊花酒（子世代13%、親世代25%、高齢世代50%）の喫食経験が徐々に低くなっており、ごはん（子世代36%、親世代14%、高齢世代50%）は親世代のみが非常に低い結果となった。認知度や経験値が非常に低く、行事自体が浸透していない傾向にあるため、喫食経験の回答数がほとんど得られず信頼性の低い結果となった。

3) 節分

節分における行事食の喫食経験を図4に示した。節分に巻き寿司を食べる風習は関西が発祥と

滋賀県における行事食の認知・経験の世代間比較

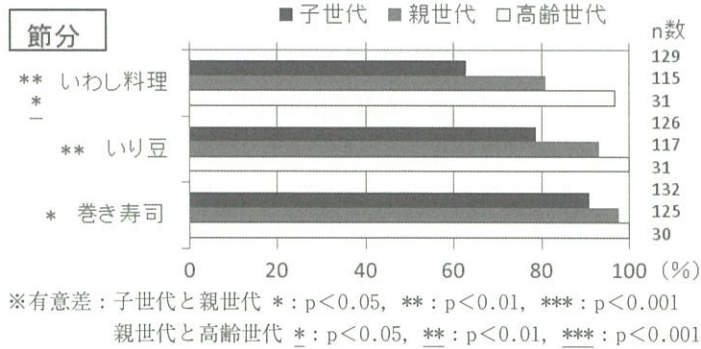


図4. 節分における行事食の喫食経験

され、さらに近年の食品業界の販売促進活動によるためか⁶⁾、巻き寿司（子世代91%、親世代98%、高齢世代100%）の喫食経験は全世代で90%以上と最も食されている行事食であった。しかし、いわし料理（子世代63%、親世代81%、高齢世代97%）、いり豆（子世代79%、親世代

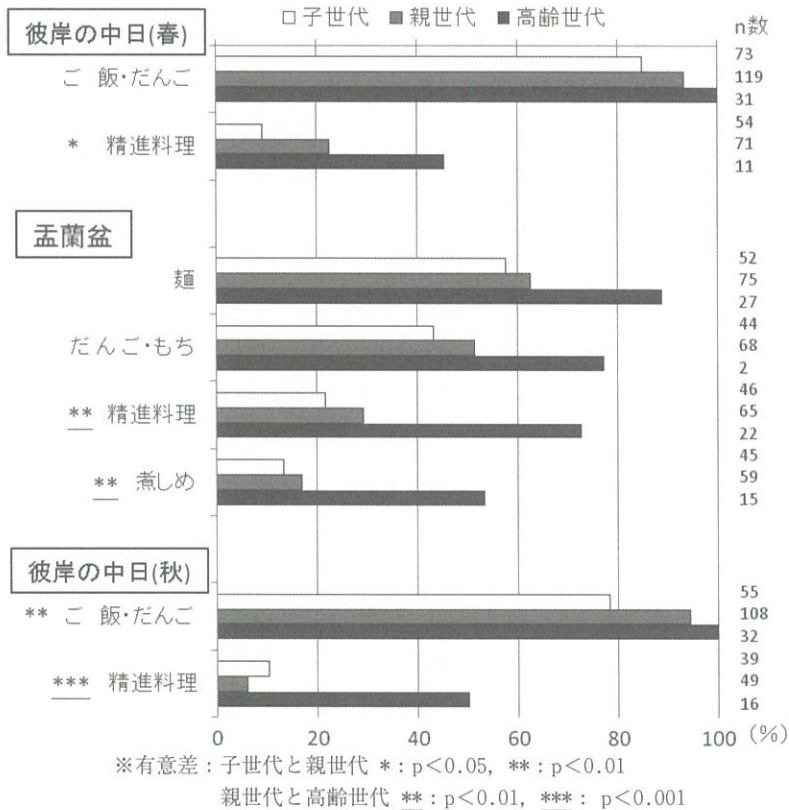


図5. 先祖に対する儀礼に関連する行事における行事食の喫食経験

93%, 高齢世代100%)とともに, 子世代と親世代において有意差がみられた。いわし料理は親世代と高齢世代においても有意差が認められ, 伝承されなくなっている傾向にあった。

4) 先祖に対する儀礼に関連する行事 [孟蘭盆・彼岸の中日 (春・秋)]

孟蘭盆・彼岸の中日 (春・秋) における行事食の喫食経験を図5に示した。孟蘭盆は, 行事の認知度や経験値が, 世代が若くなるにつれて急速に低くなっている傾向にあった。同様に, 麺 (子世代58%, 親世代63%, 高齢世代89%), だんご・もち (子世代43%, 親世代51%, 高齢世代77%), 精進料理 (子世代22%, 親世代29%, 高齢世代73%), 煮しめ (子世代13%, 親世代17%, 高齢世代53%) の全ての行事食が, 世代が若くなるにつれて喫食されない傾向にあった。特に親世代と高齢世代の間で差が大きく, 精進料理と煮しめにおいては1%の有意差がみられた。

彼岸の中日 (春) では, ご飯・だんご (子世代85%, 親世代93%, 高齢世代100%) は全世代で高い傾向にあった。精進料理 (子世代9%, 親世代23%, 高齢世代45%) は世代が若くなるにつれて徐々に食べられなくなっており, 子世代と親世代に5%の有意差が認められ, 若者はほとんど喫食経験がなかった。彼岸の中日 (秋) においても, ご飯・だんご (子世代78%, 親世代94%, 高齢世代100%) において子世代と親世代で1%の有意差があったが, 全世代で喫食経験が高い傾向にあった。精進料理 (子世代10%, 親世代6%, 高齢世代50%) は, 高齢世代の半数が喫食していたものの, 子世代と親世代はわずかしがなく, 伝承されていないことがうかがえた。それぞれの家庭で受け継がれ守られてきた調理や加工の技術や知恵も同時に失われつつあることがうかがえる。

5) 祭り (春祭り・秋祭り)

祭りにおける行事食の喫食経験を図6に示した。春祭りは全世代においてご飯・すし (子世代88%, 親世代91%, 高齢世代96%) の喫食経験が90%前後と高く, だんご・もち (子世代52%,

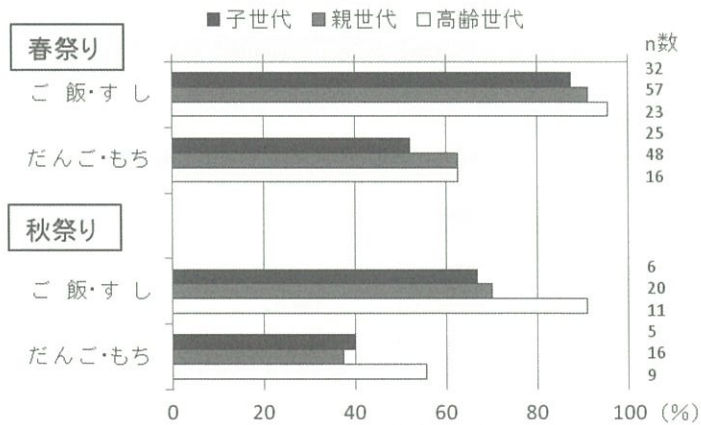


図6. 祭りにおける行事食の喫食経験

滋賀県における行事食の認知・経験の世代間比較

親世代63%，高齢世代63%）は全世代ではほぼ60%食べられていた。認知度と経験値は世代が若くなるにつれて低くなる傾向がみられたが、春祭りの行事食は有意差が認められず、受け継がれていると思われる。

秋祭りも春祭りと同様に、だんご・もち（子世代40%，親世代38%，高齢世代56%）に比べてご飯・すし（子世代67%，親世代70%，高齢世代91%）の喫食経験が高い傾向にあった。どちらも有意差はみられなかったが、高齢世代は子世代と親世代に比べてどちらも20%ほど高い傾向にあった。秋祭りの回答数は春祭りに比べて少なく、滋賀県では春祭りの方が身近な祭りであることがうかがえた。

6) その他、喫食経験の高い行事食（土用の丑・お月見・冬至・クリスマス・大みそか）

喫食経験が高かった行事食について図7に示した。土用の丑のうなぎの蒲焼き（子世代96%，親世代99%，高齢世代97%）は、どの世代も喫食経験が非常に高く、伝承されていることがうかが

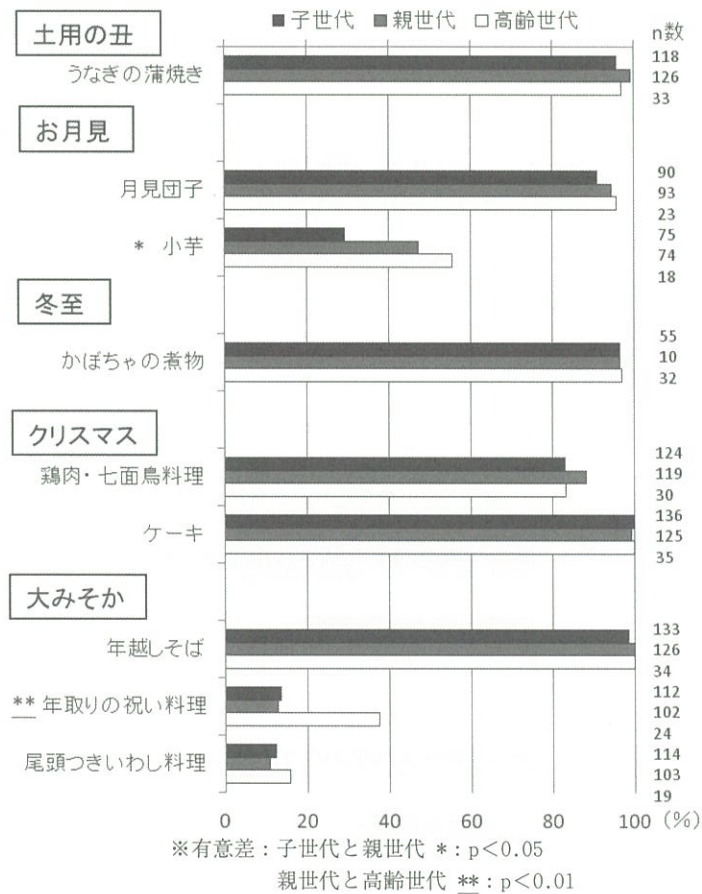


図7. 喫食経験の高い行事食

がえた。

お月見では、どの世代でも月見団子（子世代91％，親世代95％，高齢世代96％）の喫食経験が高い傾向にあった。小芋（子世代29％，親世代47％，高齢世代56％）は世代が若くなるにつれて低くなっており、子世代と親世代に5％の有意差が認められた。

冬至のかぼちゃの煮物（子世代96％，親世代96％，高齢世代97％）も、どの世代も喫食経験が高く、世代を越えて伝承されていた。

クリスマスは、鶏肉・七面鳥料理（子世代83％，親世代88％，高齢世代83％）とケーキ（子世代100％，親世代99％，高齢世代100％）のどちらにおいても、全世代で喫食経験が高く、我が国古来の伝統行事に加えて、新しい年中行事として広まっていることがうかがえる。

大みそかでは、どの世代においても年越しそば（子世代98％，親世代100％，高齢世代100％）のみ100％に近い喫食経験を示し、伝承され定着しているといえる。年取りの祝い料理（子世代13％，親世代13％，高齢世代38％）と尾頭つきいわし料理（子世代12％，親世代11％，高齢世代16％）は喫食経験が低かった。

ま と め

近畿の大学・短期大学に在籍する学生およびその親、その他近畿在住者のうち、滋賀県出身者を対象に年中行事の認知度及び経験値、行事食の喫食経験について、全国統一調査用紙を用いてアンケート調査を行った。調査結果を子世代（10～20歳代）、親世代（40～50歳代）、高齢世代（60歳以上）に振り分け、子世代と親世代の比較、親世代と高齢世代の比較を行い、得られた結果を以下にまとめた。

1. 年中行事の認知度

全世代で認知度が90％以上と高い行事は、正月、人日、節分、端午、七夕、土用の丑、お月見、クリスマス、大みそかであり、認知度が50％以下と低い行事は重陽のみであった。五節句（人日、上巳、端午、七夕、重陽）の認知度よりも、正月、節分、クリスマス、大みそかなどでの認知度が高い傾向がみられた。盂蘭盆と祭りの行事は、世代が若くなるにつれて急速に低くなる傾向がみられた。

2. 年中行事の経験値

全世代で経験値が90％以上と高い行事は正月、節分、上巳、クリスマス、大みそかであり、経験値が20％以下と低い行事は重陽であった。経験値においても認知度と同様に、五節句（人日、上巳、端午、七夕、重陽）の経験値よりも正月、節分、クリスマス、大みそかなどでの経験値が高い傾向にあった。また、人日、七夕、お月見は、認知度は高かったのに関わらず経験値は低く、行事としての意識が低下していると思われる。認知度と同様に盂蘭盆と祭りの行事は、世代が若くなるにつれて経験値も急速に低くなる傾向にあった。加えて冬至でも同様の傾向がみられた。

3. 行事食の喫食経験

生活の節目となる正月の雑煮やおせち料理（なますを除く）、上巳のご飯・すし、土用の丑のうなぎの蒲焼き、お月見の月見団子、冬至のかぼちゃの煮物、クリスマス料理、大みそかの年越しそばは全世代で喫食経験が高く、年齢に関係なく多くの者が喫食していることが明らかとなった。一方、正月の屠蘇、節分のいわし料理、上巳の白酒とはまぐりの潮汁、彼岸の精進料理、盂蘭盆・七夕・重陽の行事食は、現代の若者に伝承されない傾向にあることがうかがえた。また、高齢世代が行事食を喫食していなければ親世代も喫食せず、子世代はさらに多くの者が喫食しないことが明らかとなった。

かつて行事食は地域の人々や親戚、家族が集って食事作りをする中で伝承され、食を囲むことで支え練り上げ育てられて人々の絆を強めてきた。多彩な四季の自然の恵みに感謝し、願いや喜びを託して作られてきた行事食は、普段の慎ましい暮らしに変化や潤いをもたらし、ご馳走をたらふく食べる喜びに溢れるものであった。

豊富な食糧に囲まれて伝統的な食生活が失われ、便利で快適な中に生きる現代、行事食を意識して作り、食べて守り続けるには努力が必要となる。世代を越えて行事食を継承していくには、行事食を食する機会を増やし、その中で真の食の豊かさを考えることが必須であると考えられる。

参 考 文 献

- 1) 松下幸子：祝いの食文化（1991）、東京美術、p 154-157、162
- 2) 吉川誠次：食文化論（1995）、建帛社、p 172
- 3) 松本美鈴：現代家庭における年中行事と食べ物（2006）、青山学院女子短期大学総合研究所年報、p 14、p 3-20
- 4) 加藤和子：本学学生のご家庭における世代間に見た行事食・儀礼食の現状について（2010）、東京家政大学研究紀要、第51号（2）p 1-8
- 5) 日本家政学会 食生活の設計と文化（1992）、朝倉書店、東京、p 168
- 6) 和のしきたり—日本の暦と年中行事—新谷尚紀（2007）、日本文芸社、p 176